

デンマークの図書館システム

—公共図書館を中心として—

梶 井 重 雄

目 次

- 序 図書館の未来像
- I 学術図書館システム
- II 王立図書館学校
- III 公共図書館法
- IV 公共図書館システム
- V む す び

序 図書館の未来像

日本図書館界の未来像が情報化社会における図書館のあり方という方向でとらえられるようになったのは、1970年代に入ってからである。(注1) 公共図書館側、大学・専門図書館側の問題提起はいずれも各館がそれぞれ個別には解決不可能な事柄のみである。

- 1) 公共図書館と大学・専門図書館のネットワークの問題
- 2) 都道府県立図書館と市町村立図書館との性格づけの問題
- 3) 図書館協力組織機構の中のライブラリー・ビュローの存在はいかにして可能か
- 4) 図書館資料の保存機能はどうあるべきか
- 5) クリアリングハウスを含めた資料提供の機能はどうあらねばならぬか
- 6) 情報の処理やサービスをする情報センター的役割はいかにあるべきか
- 7) 全国組織によっていかにして資料の貸出率を高めるか
- 8) もっと根源に帰って図書館精神とは何か

等々の問題において、日本の図書館界はいま図書館システムの出発点に立っているのである。

デンマークの図書館システムの出発はすでに今より60余年前である。

1909年(明治42)のランゲ(H.O.Lange)のナショナルプランの提案に始まって、1920年(大正9)すでに近代的図書館の成立を見、営々として今日に至ったのである。私がデンマークにおいて入手したトルセン(Leif Thorsen)の英訳本『デンマークの公共図書館』(Public Libraries in Denmark)は、そのエピグラムにジェンセン(Johs. V. Jensen)の次の言葉をもってはじまっている。(注2)

図書館はあなたが世界から身を隠す4つの壁ではない。その反対にあなたがそこから自然と時(nature and time)とを観察することの出来る山上の窓(window on the mountain)である。

この「山上の窓」という言葉に象徴される明るく美しいガラス張りの図書館がデンマーク(面積43.069km²)の至る所に聳え、デンマーク人(1970年の人口調査で4,921,000人)の誰でもアプローチすることの出来るように図書館の連絡網が張りめぐらされているのである。

そうしたシステムの見事さについて、デンマークの前ライブラリー・ディレクターであったハンセン(Robert L. Hansen)はかく記している。(注3)

今日のデンマークの図書館サービスは1つの構成単位(a unit)、一換言すればデンマークに住むすべての学究者や読者が、デンマークの各図書館にあるいかなる図書をも利用することの出来る1つの大きなシステム(one large system)一と考えられなければならない。

ジェンセンの言う「山上の窓」は、実はシステム化されて国中に整然と張りめぐらされたネットワークの中の1つの図書館であり、1つの分館或いは動く図書館(ブックバス・ブックポート)の明るい窓に具象化されている象徴としての「山上の窓」であり、デンマークのすべての図書館は1にして多、多にして1の有機的なネットワークを構成しているので、その点ではまさに現代の情報社会における図書館の1つの典型とみなして差支えないとおもう。

私はデンマークの図書館システムを述べるに先立って、かかるシステムを構想したランゲの図書館精神に耳を傾けたいと思う。(注4)

図書館司書(librarian)にとって、その業務(work)は、天職(vocation)である。彼(その司書をさす)は先ず第1に愛の為に(for love) その業務を行うのであって、金銭の為にではない(not for money)。従って此の世の誰ともその仕事(jobs)をとりかえはしない。

ここには司書の仕事は聖職であって、これに従事するのは愛と意志によっていることを明瞭に語っている。デンマークの国教は福音ルター派で、国教の信者は総人口の約97%、ローマカトリックの信者は約22,000人といわれる。内村鑑三の「デンマルク国の話」は1864年独逸2国との戦いに敗れ、その敗戦のどん底から自国デンマークを救ったデンマーク人の信仰の偉大さを語っている。私は今、思いを新たにしてデンマークの図書館精神の中に愛と意志によるキリスト教精神の深さを思うのである。

此のキリスト教精神と近代の合理化精神(Rationalisation)とが、愛と理性によって矛盾することなく一貫して流れているのがデンマークの図書館システムであるとおもう。

さてデンマークの全国的図書館システムは、2つの大きなネットワーク即ち公共図書館システムと学術図書館システムの協力によって成り立っている。更に此の協力を支えるものとしてデンマーク王立図書館学校があり、デンマーク図書館協会がある。公共図書館システムの強力な支えとしては、公共図書館法がある。

先ず公共・学術両図書館システムの協力についてであるが、この2者は非常に密接な関係にある。数年前に、その為めの公式の委員会(注5)が設立された。両システムの間に相互貸借の橋渡しをするものとしてクリアリング・ハウス("Clearing House")即ち貸借センター(Loan Centre)が出来、又図書館センター(Library Central)の様な重要な施設が出来ている。

私は此の論をすすめるに当って、先ず学術図書館システムについて述べ、王立図書館学校が

いかに両図書館システムに密接に結びついているかを論じ、その上で公共図書館法、公共図書館システムに言及しようと思う。

I 学術図書館システム

前述のランゲ(H. O. Lange)は、当時王立図書館長をしていたが、つぶさにアメリカの図書館を視察し、特にその郡図書館(County Libraries)に大いに学ぶ所があり、1909年に、小さな教区図書館(Parish library)から大きな学術図書館(research library)へと図書館の国家的奉仕網(a national network)を作るべきであるとの構想をもった。

公共図書館システム(後述)に関しては、地方公共図書館群の上部構造として中央図書館網(a net of central libraries)を設けるという構想で、此の構想は1920年の「公共図書館法」に於てその実現を見た。

学術図書館システムの方は、それより数年おくれて、国立図書館、大学図書館、単科大学及び専門図書館等を含む1つの図書館奉仕網としての設立をみた。

学術図書館システムの基礎は45年前にさかのぼることが出来る。当時公式の委員会が、レポートを作成し、その提案がなされると直ちに実行に移され、学術図書館間の協力と主題の専門化(subject specialization)という形に基礎をおいて、そのネットワークを確立していった。

先ず第1にコペンハーゲンに於ける最大最古の2つの図書館、王立図書館(Det Kongelige Bibliotek)と大学図書館(Universitetsbiblioteket)による主題の専門化が確定された。即ち王立図書館は人文科学(humanities)と社会科学(social sciences)の分野において、大学図書館は医学(medicine)と自然科学(natural sciences)の分野に於てその収集を集中化した。王立図書館にある医学と自然科学の収書は大学図書館に移され、大学図書館は、医学と自然科学における中央大学図書館としての設立を見た。一方人文科学の分野における大学図書館の図書及び定期刊行物は王立図書館に移された。そして、西洋及び東洋の稿本(manuscripts)の包括的な収集が王立図書館の有に帰した。

デンマークには3つの国立図書館(national libraries)がある。王立図書館、大学図書館及び在オルフス国立図書館(Statsbiblioteket i Århus)である。

王立図書館は18世紀の創立、18世紀の中期以来有名な国立図書館として認められ、1697年以来、版權登録納本(copyright deposit)の納本図書館として、王立図書館デンマーク部(Royal Library's Danish Department)が、デンマーク出版のあらゆる主題にわたるあらゆる図書と定期刊行物の1部をその出版者から受けている。

尚外国部(Foreign Department)では外国の作品群と5000点のインキュナビュラ(incunabula)の収集。稿本部(Department of Manuscripts)では西洋の稿本53,000点。地図とさし絵の部(Department of Maps and Pictures)では肖像(portraits)770,000点もを含んでいる。音楽部では総譜(scores)の書架2 Kmである。東洋の部(Oriental Department)では、40か国語にわたる稿本

(manuscripts)4000点。ユダヤ部(Judaic Department)の50,000冊である。

以上総計、王立図書館は

1,700,000冊	図書
100,000点	学位論文(theses)
1,500,000点	その他の項目(other items)

大学図書館は1482年の創立であり、長いむしろ目立たない歴史をもって来たが、今では2つの主な収書に分割されて、コペンハーゲン市の各方面に所在し、主として大学教職員(university faculty)と学生の要求をみたしている。蔵書の総計は、第1部が400,000冊。第2部が約900,000点の項目にわたっており、その中には外国からの学位論文(doctoral theses)420,000点以上が含まれている。

ナショナル・ライブラリアン(National Librarian)について。(第1図参照)(注6)

王立図書館と大学図書館は2つの部(two sections)として、1943年にナショナル・ライブラリアンによって指導される1つの管理体(one administrative unit)に合併された。

一方また以前には単科大学などにサービスしていたいくつかの専門図書館が1920年代において合体してネットワークを組織し、それらの図書館群が、夫々独立した専門主題分野において責任をもつ「国家全般にわたる図書館の地位」(status of nation-wide libraries)を獲得した。それらが全国にサービスする専門図書館である。即ち、デンマーク工科図書館(*Danmarks Tekniske Bibliotek*)、デンマーク農酪図書館(*Danmarks Veterinær og Jordbrugsbibliotek*)、王立美術院図書館(*Kunstakademiets Bibliotek*)、いくつかの軍の図書館、中央教育図書館、実業大学院図書館(Library of the Graduate School of Business)等々である。

こういう方法で公衆に窓を開かれているいくつかの図書館があらゆる主題を扱っている。同時にまた此のシステムは、多様な図書館の収書において不必要な重複を必ず避ける様になる。

王立図書館、大学図書館、工科図書館等々の此等コペンハーゲンの学術図書館の中央館は、第2級(second level)と呼ばれるネットワークに加入した沢山の専門図書館の庇護をする立場にあって働いている。その専門図書館群はむしろ雑多なグループで、博物館図書館、独立した研究所、多くの施設の、セミナーの、教職員の、部の図書館等々で、それらは総合大学や単科大学に属している。

又中央館は第2級の専門図書館群のあらゆる図書館活動を庇護して、或は教職員や学生の自由に使用し得るあらゆる収書の総合目録(union catalogues)を編成したり、数年前からはじまったことであるが、本館から大きな施設図書館のいくつかに、又外の専門図書館に、専門職のスタッフを配置することをさだめた。そのとりきめの実例としては、王立図書館と大学図書館が、現在12人以上を各方面の施設及び専門図書館に配置している。即ち国立博物館、アジア学術研究所、国立病院、動物園図書館等々へである。

第1級学術図書館の中でも有名なのは、**デンマーク工科図書館**(*Danmarks Tekniske Bibliotek*)である。此の図書館はデンマークにおけるドキュメンテーション・センター(documentation

centre) であり、また化学、建築学、電気工学、コンピューターの分野における科学技術と産業の文献のための中央図書館でもあって、310,000点の書誌的項目を有している。コペンハーゲンにおける此の図書館はその庇護のもとに無数の小工科図書館をもち、それらの小図書館網の親図書館(mother library) と呼ばれ、そのサービスはその親図書館に結びつけられている工業学校群や地方産業などにも及んでいる。(写真3,4参照)

公共図書館システムにとって最も深い関係のある国立図書館である**在オルフス国立図書館**が設立されたのは1903年であった。それは総合公共図書館(general public library)としてであった。しかしながら1928年にオルフス大学(Århus University) が創設されてからは大学図書館としての責任も引継いだ。しかし1938年には公式に公共図書館の中央的存在となった。即ち公共図書館はその都市間相互貸借に於ては先ず第1に在オルフス国立大学図書館を利用するという点においてコペンハーゲン外のすべての公共図書館に対する中央図書館("central" library)としてサービスをせねばならない。此のとりきめは学術・公共図書館間の協力の更に明らかな証拠となった。

学術図書館国立顧問会議について (第I図・写真2参照)

デンマーク学術図書館のより高度な統一への努力が1943年に奨励された。即ち政府は1つの事務局を創設した。それを支えるものはナショナル・ライブラリアン (National Librarian=rigsbibliotekar) と呼ばれた。そのナショナル・ライブラリアンの管理範囲は、コペンハーゲンの王立図書館と大学図書館である。それはともに共通の予算とスタッフ等をもつ1つの管理体として組織されているのだが、更にその職能は共通の活動を管理することである。即ちすべての学術図書館が受入れた外国文献の年次総合目録の出版および国際出版物交換のための中央事務局を管理することであり、公共図書館との協力に関しては、学術図書館部を代表することであり、すべての学術図書館の相互間協力活動を指導することである。1948年に創設されたデンマーク学術図書館協会(Association of Danish Research Libraries) の会長もまたナショナル・ライブラリアンである。また、1960年代に非公式の計画及び調整委員会が誕生し、それが後に正式な地位を得て学術図書館国立顧問会議(National Advisory Council for the Research Libraries) と呼ばれた。此の会議の委員は最も重要な学術図書館の50名の館長が任命された。またその理事会には職権上の資格で最も大きな図書館の館長がえらばれた。同様にナショナル・ライブラリアンは、その顧問会議及び理事会の職権上の議長である。ナショナル・ライブラリアンの事務局は此の顧問会議の事務局(Council's secretariat) として働く。此の顧問会議には多くのコンサルタント(Consultants) が関係している。又、自動化情報処理(ADP=Automatic Data Processing) の事務局をもち、各図書館間の更にすすんだ計画や調整を試みている。此の顧問会議の行っている仕事の実例をあげると次のようになる。すべての学術図書館における目録規則と分類表の標準化、すべての学術図書館のための基本的な目標の近代化、主題の専門化計画の改正、新聞のマイクロフィルム計画、大学図書館の本館(main university libraries)と所謂、研究所(セミナー)図書館等との協力方式、新大学図書館設計などである。

この顧問会議の理事会は政府の各省に意見を具申することも出来る。月に1回の理事会はすべての学術図書館に関係する沢山の今日の問題を処理している。

この顧問会議は新設の北欧学術図書館協力委員会(Committee for Co-operation among Nordic Research libraries)に2人の代表を送っている。此の委員会の目的は、スカンジナビヤプラン(Scandia Plan)に関しては、今までのスカンジナビヤ図書館間の協力を更に強化し正式なものにすることにある。そのスカンジナビヤプランとは北欧の学術図書館間において、図書と定期刊行物の受入に際して主題分野の収集に関する北欧ファーマントンプラン(Nordic Farminton-Planと呼ばれうるものである。顧問会議はまた、ドキュメンテーションとインフオーメーションの公式の計画委員会である「ドキュメンテーション及びインフオーメーションの科学及び科学技術会議」(Danish Council for Technical and Scientific Documentation and Information)とも密接な協力のもとに働いている。

II 王立図書館学校

デンマーク王立図書館学校(Danish School of Librarianship=*Danmarks Biblioteksskole*)はデンマークにおける唯一の最も権威のある図書館学校である。此の学校の入学許可に関しては先ずデンマークの学校制度のあらすじを述べなければならない。(注7)

デンマークの児童は7才で小学校(primary school)に入学、9-10年後に進学組は大学予備教育機関(gymnasium: 中学、高校を兼ねた如きもの)に入学、そこで大学入学許可(matriculation)試験のための3年間を在学。

此の試験(*studentereksamen*=大学生となる試験)をパスするとデンマークにおける大学の1つ或いは専門施設のいくつかのハイア・スクール(higher schools)の1つに入る学生の資格が与えられる。年令でいうと19才位になる。

公共図書館の司書を希望する19才の青年は、先ず此の大学入学許可試験を通過しなければならない。それから公共図書館で実習を受ける認可を得ねばならない。そのためにデンマークでは最大の図書館が50館えらばれている。此の図書館での6カ月の実習の後に、その素質のある図書館員は、此の国にある唯一のデンマーク図書館学校への入学が許可される。此の学校の志願者は実習図書館の館長の推薦がなくてはならない。従って入学志願者の数も実習図書館の実習生の数によって自動的にきまってくる。

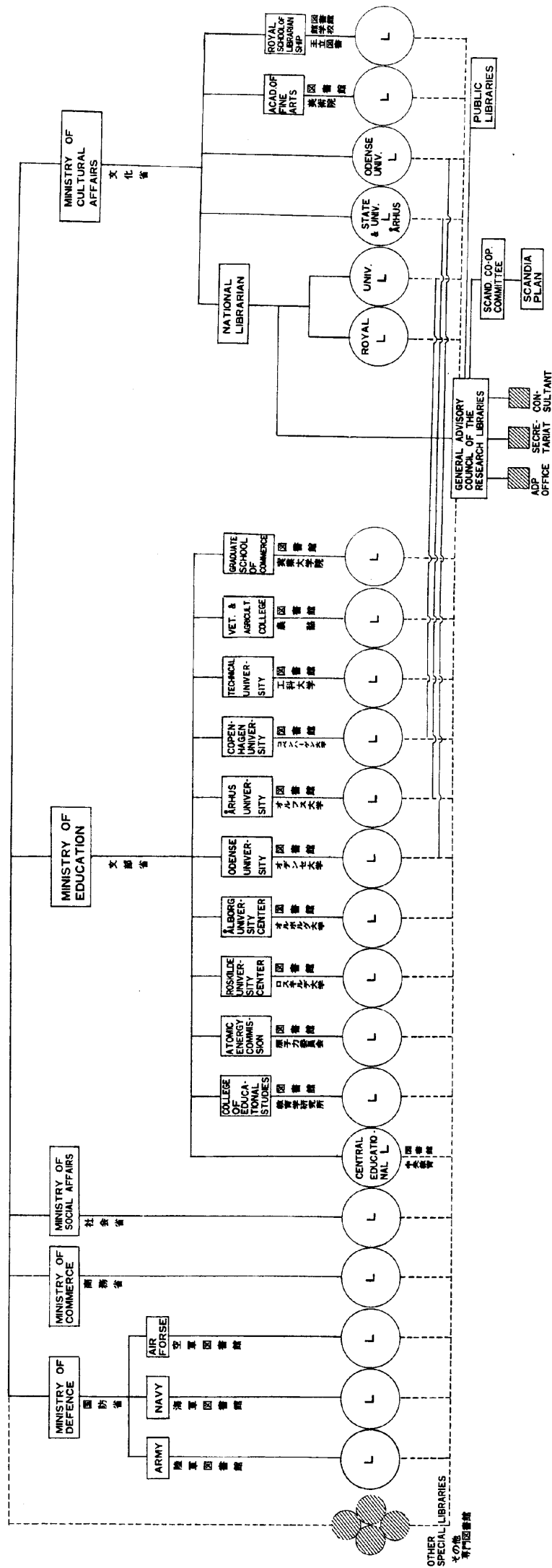
現在のデンマーク王立図書館学校は1966年6月14日法№ 232 によって設立され、1967年7月1日に実施された。

尤もデンマークの図書館員養成は1918年に始まり1920年には5カ月間に強化、1938年には9カ月間、1956年にはカリキュラムの充実をはかり、此の学校の目的を規定した。即ち公共図書館の専門的司書養成と学術図書館の専門的司書養成とであり、更に図書館学の分野において研究を増進することを此の学校の義務とした。

PARLIAMENT

議会

L = LIBRARY



デンマークの図書館システム

此の学校は1964年にフレデリクスベルク (Frederiksberg) に近代的な館舎をたてたが、更に1967年にビルケティンゲ 6 番 (6, Birketinget) の現在地に移った。(注 8)

総面積12,000m² 6 階建て、1000人の学生が収容出来る。現在の学生数は第 1 部 (公共図書館部) が約750名第 2 部 (学術図書館部) が約200名である。

スタッフは教授群 70 名、非専任講師群 150 名、司書その他 35 名で構成されている。

施設は

講 堂	360m ²	600人収容
講義室 3	$\begin{cases} 235\text{m}^2 \\ 154\text{m}^2 \\ 122.5\text{m}^2 \end{cases}$	100人～ 250 人収容
会議室	98m ²	
学生室	336m ²	
食 堂	728m ²	(内スタッフ専用 73.5 m ²)
図書館	読書室	496m ²
	図書館 I	122.5m ²
	図書館 II	235m ² (公共図書館用寄託図書館)
	目録室	24.5m ²

図書数 35,000冊 (内、6000冊が図書館参考文献)

以上の外に此の学校の施設の特色をなすのは特別教室の充実で、カリキュラムの重要科目に関しては主題別の図書を別置した書架が備えてある。その他に 20～40 名収容出来る教室が多数ある。

公共図書館部 (Section I) (第 1 表参照)

公共図書館に司書となる為めの図書館教育は 4 年間で、図書館学校における理論的研究の 6 学期とおしなべて約 10 か月の実習業務 (trainee service) の 2 期間 (2 period) とである。

必須科目のカリキュラムは第 1 表に示した通りである。此の学校の教育は 3 部 (3 parts) よりなっている。即ち第 1 部 (first part) が 2 学期 (2 terms)、第 2 部が 3 学期、第 3 部が 1 学期である。

理論的教育の第 1 部は 2 学期よりなっている。教育 (instruction) は講義とセミナーの形で与えられ、又、研究目的の為に各種機関への訪問がきめられている。第 1 部の終りに次の主題で筆記試験が行われる。

記 述 目 録 法 (Descriptive cataloging)

分 類 (Classification)

書 誌 学 (Bibliography)

参考図書の知識 (Knowledge of reference books)

口 答 試 問 (oral examination) は文献 (Literature) について行われる。

第1部の試験にパスした学生に対しては直ちに9月から12月までの4か月間にわたる公共図書館における実習業務が待っている。此の期間に「文化の普及」(Dissemination of Culture)と「デンマークの図書館組織」(Danish Library Organization)の主題に関して論文を書かなければならない。成績の評点は此等の論文に対して与えられる。

理論的教育の第2部は3学期にわたっている。教育は講義、セミナー、さらに一層変則な授業が行われ、海外の研究旅行もきめられている。第2学期の後に、2月から6月にかけての5か月の期間が実習の図書館業務にあてられている。此の期間はより専門的な方法で図書館業務に従事し、一方また特別にえられた主題の予備的な研究に専念しなければならない。此の主題が第3部の為の研究に継続される。又、主なる試験論文のための資料の収集にも役立つ。

第2部の教育の終りには「文献」(literature)と「知識の構成と主題文献」(Organization of knowledge and subject literature)の筆記試験が行われる。学生は此の間に多くの選択科目の主題に関して試験を受けなければならない。試みにその選択科目をあげると、

美術、伝記、人類学、デンマークの歴史、ドラマ、経済学、映画とテレビ、法律、音楽、哲学、政治学、心理学、宗教、科学
等である。

研究の第3部の間に、教育は「図書館の知識」(Knowledge of libraries)即ち「図書館史」(Library history)、「図書館法」(Library legislation)及び「管理」(administration)の主題を含む一般用語に集中される。又特殊な研究の為に選ばれた主題に関しては、一層完全な教育が与えられる。即ち、「1920年後のアメリカ文献の情勢」「レファレンスワークにおける定期刊行物」「地方書誌の編成」「音楽図書館の構成と活動」等である。又此の期間に、学生は自ら選んだ特殊な研究主題の部分を形成する論題についての主なる試験論文の準備をしなければならない。

最後の口答試問は「文献の知識」と特殊な研究主題に関して行われる。

授業料は無料であり、学生は国家の財政的支持を得ることも可能である。

学術図書館部(Section II)(第2表参照)

大学図書館、専門図書館等の学術図書館に司書となる為めの図書館教育は4年間で、王立図書館学校における理論的研究の2年間と2つの学術図書館で正規の通り行われる2年間でである。カリキュラムは第2表の通りである。

理論的研究の第1部(first part)は2学期(two terms)からなっている。教育は講義とセミナーの形で与えられる。研究目的の視察は決められている。ロシア語とフランス語の知識のない学生の為に此等の国語の基礎コースが与えられる。其の上、第1年目にタイプライターの熟練が修得されねばならない。

第1部(first part)の終りにおける試験と第2部の終りにおける試験は第2表の通りである。第1部の試験にパスしたものは2年間の実習業務(Trainee service)を、教育を公認されている学術図書館で受ける。学生は、1年目を人文科学と社会科学の分野において専門化された図書館において養成され、2年目を、科学と工学の分野において専門化された図書館において養

第1表 デンマーク王立図書館学校におけるカリキュラムと特別教室との対照表 (Section I)
(必須科目)

Section I (public library) Curriculum	必須科目	Examination(試験)	Subjects(科目)	Trainee(実習)	Subjects(科目)	Sections (特別教室)	Size (大きさ)
Bibliography	書誌学	1st part	Bibliography			Bibliographical Section	73.5m ²
Reference work and documentation	参考文献とドキュメンテーション	1st part	knowledge of reference books			Reference Section	147m ²
Methods of cataloguing	目録法	1st part	Descriptive cataloguing			Section of Classification and Cataloguing	122.5m ²
Theory of classification	分類法	1st part	Classification				
Literature (1)	文庫(1)	1st part oral examination	Literature (I)	1st part trainee	Dissemination of culture and Danish library organization		
Dissemination of culture and Danish library organization	文化の普及とデンマークの図書館組織						
Literature (2)	文庫(II)	2nd part	Literature (2)			Section of the Humanities (人文科学)	147m ²
Organization of knowledge and subject literature	知識の構成と主題文庫	2nd part	Organization of knowledge and subject literature			Section of Literary History (文学史)	294m ²
		2nd part	追加科目群 (Optional courses)	2nd part trainee	Knowledge of the different fields of library science	Section of Science Literature (科学文献)	98m ²
					Study of chosen subject	Section of Technical Literature (技術文献)	98m ²
Book selection	図書選択						
Acquisition, theory and practice	受入れの理論と実際						
Work in children's libraries and school libraries	児童図書館と学校図書館のしごと					Section of Library Work with Children	122.5m ²
Children's literature	児童図書						
Study and reading technique	学び方とよみ方						
Audio-visual material	視聴覚資料						
Administration and local government	管理と地方自治	3rd part	(Administration)			Section of Audio Visual Aids	73.5m ²
Management and communication	経営とコミュニケーション					Music room	73.5m ²
Library legislation	図書館法	3rd part	(Library legislation)			Section of Library Administration	73.5m ²
Library building	図書館建築	3rd part	Knowledge of libraries				
Technical facilities of libraries	図書館の施設設備	3rd part oral examination					
Library history, Co-operation between library and Library legislation	図書館史、図書館と図書館法の協力	3rd part	(Library history)				
		3rd part oral examination	(Specially studied subject)				
Book history	図書館の歴史					Section of the History and production of Books	49m ²
Book production and distribution	図書の生産と分配						
Special library reports	専門図書館レポート						
Library terminology in foreign languages	外国語の図書館用語						
Electronic data processing	電子計算機情報処理方式						
Service to readers, public relations	読者へのサービス、広報活動						
Special collections	特殊集書						
Source publications and archives	刊行物資料と文書					Danish Folklore Archives	94m ²
Extramural services	公開サービス						
Sociology	社会学					Sociological Section	73.5m ²
Psychology	心理学						
Adult education	成人教育						

デンマークの図書館システム

第2表 Section II (research library) Curriculum

Curriculum	Examina- tion	Examina- tion or oral examination
General reference works (一般参考業務)	1st part	
General bibliography (一般書誌学)	1st part	
Acquisition (図書の受入)		1st part
Bookbinding and book preservation (図書の製本と保存)		1st part
Service to readers (読者へのサービス)		1st part
Library terminology in foreign languages (外国語における図書館用語)		1st part
Book production and distribution (図書の生産と分配)		1st part 2nd part
Cataloguing (目 録 法)	1st part 2nd part	
Library history, Co-operation between libraries and library legislation		1st part 2nd part
Transliteration (翻字)		1st part
Study and reading technique (研究法と読書法)		
Reading of manuscripts (写本のよみ)		
Classification (分 類)		
Special reference works, Special bibliography and Organization of knowledge	2nd part	
Documentation and reference work		2nd part
Book history		2nd part
Library building		2nd part
Library administration		2nd part
Library organization and management		2nd part
Electronic data processing		2nd part
Audio-visual material		
Archives (文 書)		

成される。又此の実地教育の期間において学生は1週に12時間の理論的研究を教授の指導によって行うことが出来る。最後の1年を再び学校において教育される。実習期間の2年間は給料が支給される。授業料無料と学生に対する国家の財政的支持については公共図書館部の場合と同様である。

学術図書館司書職(Research librarianship) コース

学術図書館司書(research librarian) として教育されるためには、学生は学位(academic de-

gree)を所有していなければならない。又学術図書館かドキュメンテーション・センターの職に任命されたことがなければならない。此のコースは 300-350 の授業時間(periods)を含み、その半ばは春期に、半ばは秋期に行われる。そのカリキュラムは(第3表参照)表の如くであるが、学生は専門員としての待遇を受ける。学校においては各人はデスカッションやグループ・ワーク(group work)に恵念し、指導なくして中々沢山の読書をする。常にある専門の主題を研究する目的で国外の図書館や関係施設を訪れる。学生は自から選んだ主題で論文を書かなければならないが、試験はしない。期間は2年間である。

第3表 Research librarianship curriculum

Research librarianship (学術図書館司書職) (2年間)
The organization and co-operation of libraries, Types of libraries
Library administration
Electronic data processing
Library equipment (図書館用品及設備)
Acquisition and preservation of publications (出版物の受入と保存)
Problems of cataloguing
Classification schemes and alphabetical subject indexing (分類表及びA B C順主題索引)
Compilation of bibliographies (書誌の作成)
Transliteration (翻字)
Scientific encyclopedias (科学の百科事典)
Introduction to bibliography and General bibliography
Special bibliography and reference work, Organization of knowledge and History of knowledge in one of the following fields: 1) The Humanities (人文科学) 2) Science, Mathematics, Medicine (科学) (数学) (医学) 3) Technology (工学) 4) Social sciences (社会科学)
Service to readers
Documentation
Adaption of manuscripts (写本の翻案)
Book history
Library history

諸課程及び高度の研究(Courses and advanced studies) コース

1967年12月18日の王立図書館学校の令達が述べる所によれば、此の学校はより高度な専門的司書の教育を提供している。即ち此の学校によって組織化された一連の大学院課程(a series

of postgraduate courses) を授けることによってなされる。その期間は1週間から4か月までの様々な持続によってなされ、公共図書館部(Section I) 或いは学術図書館部(Section II) 或はその両方との関係において行われる。

公共図書館部のもとに行われる一層長期のコースのいくつかは、4年コースの教育に対する補助コースであって次の様な主題で与えられる。「児童図書館」(Children's libraries)「音楽図書館」(Music libraries)「病院図書館」(Hospital libraries)「図書館管理」(Library administration)「参考業務」(Reference Work)「青少年のための業務」(Work with young people)「レコードの収集」(Record collections)「図書館建築と施設・設備」(Library buildings and equipment)「図書館と映画」(Libraries and film)「広報活動」(Public relations)等で、これらの論題にわたるコースは、図書館学の分野及びその関係範囲の新しい発展と業績におくれないでいるためのものである。

III 公共図書館法

デンマークにおいては「公共図書館法」と公共図書館とは当然のことながら密接な関係にある。王立図書館学校の公共図書館部(Section I)のカリキュラムに「図書館と図書館法との協力」とあるのもなるほどとうなずかれる。更に言えば、デンマークの図書館史は図書館法改正の歴史であり、同時に図書館サービス普及の歴史でもある。公共図書館法は1920年法の成立以来幾度か改正されて、1964年の「デンマーク公共図書館法」(The Danish Public Libraries Act)の現行法に至っている。以下現行法の特色を列記すると(注9)

- (1) 利用者第1主義と多面的資料の重視
- (2) 成人と同等に児童の重視
- (3) 公共図書館の自治体における義務設置と図書館職員の重視
- (4) 地方公共図書館、中央図書館、特殊施設図書館の3種の助成金の充実
- (5) 文化省所属の図書館指導部と図書館会議の重要性

以上に要約することが出来る。以下順を追って述べる。紙面の許す限り詳細に公共図書館との関係に於て実例を示しつつ説明することとする。

(1) 利用者第1主義と多面的資料の重視

公共図書館法第1章目的(Part1. Purpose)の所に、

公共図書館法の目的は「図書及びその他の適切な資料」(books and other suitable materials)を無料(free of charge)で利用(available)せしめることによって、情報・教育・文化の普及をはかることである。

先ず此の「利用せしめる」(to make available)の語についてトルセン(Leif Thorsen)は、「1920年の法以来数度の改正を経て、此の度の法に至って定着した言葉である」と言っている。利用者第1主義の宣言とも言うべき重要な言葉である。デンマークの公共図書館は民衆(public)の為の図書館であり利用者の為の図書館であり、利用者への最善のサービスは当然資料の無料提

供となる。

次にその資料は「図書及びその他の適切な資料」とあって図書館資料の多様化、資料選択の中立性、資料選択の重要性を此の文中にこめている。「公共図書館法1964」の注(Notes)に「その他の適切な資料」は「グラモホン・レコード、フィルム及びその他の視聴覚資料を含む」(includes gramophone records, film and other audio-visual materials)とあるように、グラモホン・レコード即ち音楽資料の重視はデンマーク公共図書館の成人部児童部ともに著しい。図書とその他の資料を等しく重視するというのはデンマーク公共図書館のプリンシプルで、私の訪問したデンマークのすべての公共図書館で児童も成人も受話器型のレシーバを耳にあてて聴き入っている姿に会った。開放された閲覧室の中の一部が音楽室になっていて利用者は常時音楽の鑑賞を楽しむことが出来る様に工夫されている。

人口60,409人(1972年4月1日)のリュンビュ市立図書館(Stadsbiblioteket i Lyngby)についてその資料と貸出状況、予算の関係、更にスタッフの数を示すと第4表のようになる。第5表は市民1人当りの蔵書数と貸出し冊数と予算額を示したものである。市民1人当りの蔵書数6.8冊、市民1人当りの貸出し冊数18.1冊、市民1人当りの予算額の198.2 クローネは(1 クローネ43.18円とすると)8.557円強となる。グラモホン・レコードの年間購入費が1600万円を越え、図書費が年間8364万円強である。予算総額が約5億である。(写真1 参照)

第4表をみると、「音楽図書館」(The Music Library)「アート図書館」(The Art Library)などと呼んでいることに気付く。そして音楽図書館には、グラモホン・レコードの外に特殊収書(Special Collection in Music Library)がある。又語学用レコードと会話用レコード(Language record courses and Spoken records)は本館の方に備えて、之を図書の貸出と同様に扱っている。

多面的資料の重視は単に資料の利用にとどまらず、その利用を通して「情報・教育・文化の普及」に発展してゆく。音楽の場合で言えば音楽資料の利用が、音楽を中心とした文化活動の充実とともに、音楽室(Music Room)から音楽部(Music Department)へ、更に音楽図書館(Music Library)へと発展してゆくことになる。リュンビュの場合音楽図書館(records library)は5室あって、175 m²である。(第2図の下図10)

1972年創設のヴィズオア(Hvidovre)公立図書館(人口、43,500人)の場合は音楽部(Music Department)216m²と音楽鑑賞室(Listening Room)58m²である。ともに1つの図書館の中の分野であることに変わりはない。(第3図参照)

(2) 成人と同等に児童の重視

公共図書館法第2章地方公共図書館(Local public libraries)の所に

各自治体(Each commune)は単独でか、或は他の自治体との連合でか、「成人部と児童部を備えた」(with a department for children as well as one for adults)公共図書館を維持しなければならない。

成人部、児童部の並立はデンマーク公共図書館経営のプリンシプルで、貸出統計も成人・児童

デンマークの図書館システム

第4表 リュンビュ市立図書館資料一覧

	本館と分館	音楽図書館	アート(Art) 図 書 館	児童図書館	学校図書館	総 計
蔵 書 31/3 1972	196,081冊	6,034冊	5,319冊	69,417冊	135,416冊	412,267冊
音楽図書館における特殊収書		約 2,000冊				2,000冊
グラモホン・レコード 31/3 1972	3,527	18,717		3,354		25,598
語学用レコードと会話用レコード 31/3 1972	2,273					2,273
初版版画 31/3 1972			1,762			1,762
ポスター 31/3 1972			457			457
カラー・スライド 31/3 1972			3,809			3,809
貸出冊数	634,906冊	10,438冊	8,441冊	196,172冊	245,800冊	×) 1,095,757冊
グラモホン・レコードの貸出数	13,196	97,065		12,616		122,877
版画の貸出数			6,081			6,081
ポスターの貸出数			2,117			2,117
カラースライドの貸出数			5,409			5,409
予 算 1972/73						クローネ 11,975,100
図 書 1972/73	クローネ 1,100,800			クローネ 229,600	クローネ 606,700	クローネ 1,937,100
グラモホン・レコード 1972/73	クローネ 129,600	クローネ 160,400		クローネ 56,000		クローネ 371,000
語学用レコードと会話用レコード 1972/73	クローネ 25,000					クローネ 25,000
初版版画 1972/73			クローネ 25,000			クローネ 25,000
視聴覚資料：学校図書館 1972/73					クローネ 100,000	クローネ 100,000

スタッフ 1/4 1972 (司書：49, タイピスト・事務員・補助員：72, その他：9)

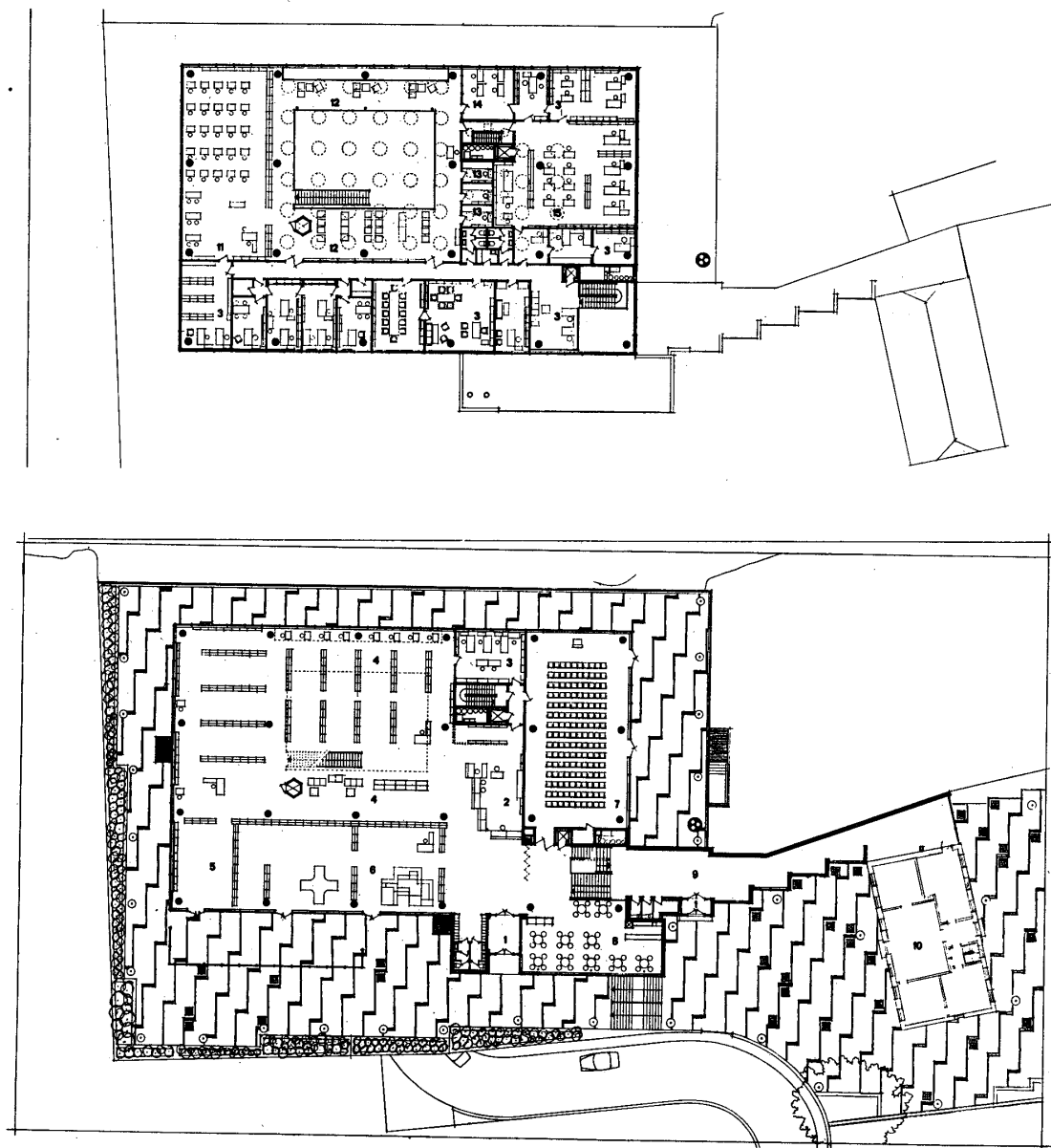
リュンビュ・タールベク (Lyngby-Taarbæk) 市の住民数 1/4 1972：60,409人

×) 語学用レコードと会話用レコードは図書として記入。

第5表

	人 口 (人) (1972)	蔵 書 数 (冊) (1972)	市民1人 当 り (冊)	貸出し冊数 (冊)	市民1人 当 り貸出 し冊数	図書購入費 (クローネ) (1972/73)	全 予 算 額 (クローネ) (1972/73)	市民1人当 り予算額 (クローネ)
リュンビュ	60,409	412,267	6.8	1,095,757	18.1	1,937,100	11,975,100	198.2

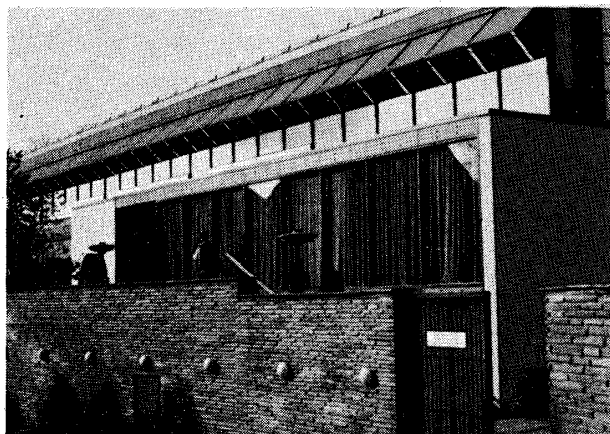
第2図 リュンビュ市立図書館平面図下図(1階), 上図(2階)



リュンビュ市立図書館平面図1階(下図) 2階(上図)

- | | |
|--------------------|----------------------------|
| 1. 入口のポーチ | 9. 展示用渡り廊下 |
| 2. 貸出カウンター(案内を兼ねる) | 10. 音楽図書館 |
| 3. 閲覧事務室 その他事務室 | 11. レファレンス室 (reading room) |
| 4. 貸出用公開書庫 | 12. 新聞雑誌閲覧室 |
| 5. 青少年室 | 13. 小研究室 |
| 6. 児童図書館 | 14. 郷土資料室 |
| 7. 講堂, 映写室 150席 | 15. 収集整理室 |
| 8. 喫茶室 | |

写真で見るデンマークの図書館



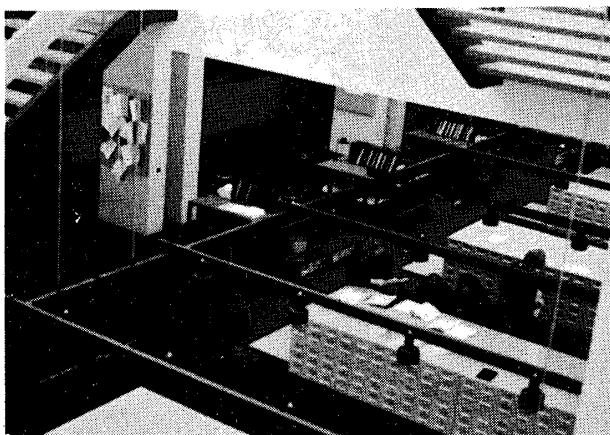
1 リュンビュ市立図書館正面



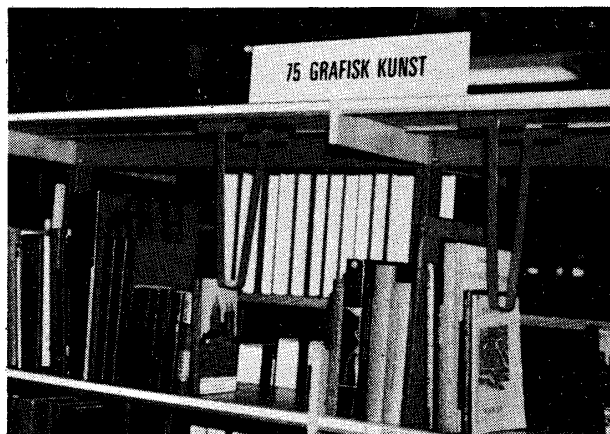
2 学術図書館システムの講義をする
王立図書館長バレ・ピアケルンド
氏（右）左は通訳



3 デンマーク工科大学図書館の雑誌
架。中央が棚式雑誌目録



4 デンマーク工科大学図書館目録室。左は書冊目録



5 ヴィズォー公立図書館の書架の一部
75 GRAFISK KUNST (graphic art) は D. C.
分類番号と分類



6 ヘルシンガー公立図書館児童部の外観▶印は
BØRNEBIBLIOTEK (children's department)



7 ヴィズォアー公立図書館の児童音楽室のにぎわい



8 リュンビュ市立図書館児童室の入口

Mystiske
væsener
Mysterious
creature

色彩豊かなデンマーク書誌センタ-
ーによる図書館製本の児童図書



9 ヴィズォアー公立図書館児童室と低書架

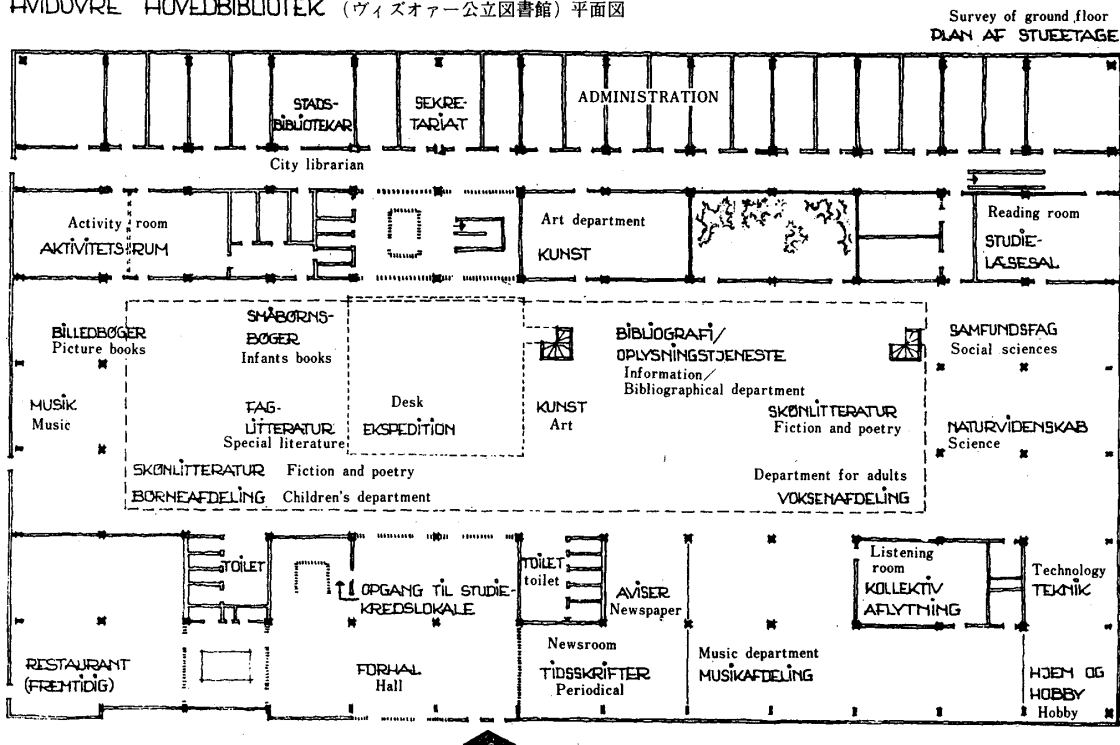


10 ヴィズォアー公立図書館。課外活動室の一画

デンマークの図書館システム

第3図

HVIDOVRE HOVEDBIBLIOTEK (ヴィズオー公立図書館) 平面図



第6表 ヴィズオー公立図書館館舎面積一覧

Survey of the Dimensions of the Premises (館舎面積一覧)

Basement (地階)	1980m ²
Parking ground (駐車場)	1600m ²
Ground floor: (一階)	
Lending department	756m ²
Art department	144m ²
Desk	144m ²
News room	108m ²
Music department	216m ²
Listening room	58m ²
Reading room	60m ²
Hall	180m ²
Children's library	432m ²
Room for activity methods	90m ²
Offices	504m ²
Above including toilets, stock, cafeteria, stairs, conservatory	3600m ²
First floor:	
4 studies of 18m ²	
2 rooms for study circles of 36m ²	
1 room for study circle with a folding door 2×36m ²	
Exhibition area 144m ²	
Above including cloakroom, staff's room, toilets, approximately	1500m ²

にわけており、王立図書館学校のカリキュラムでも必須科目に「児童図書館と学校図書館のしごと」「児童図書」「学び方とよみ方」などを入れている。

前述のリュンビュ市立図書館では

青少年室 (young people's library)	} 275m ²
児童室 2 (Children's library)	

ヴィズオア公立図書館(Hvidovre Kommunes Bibliotek)では(第6表参照)

児童図書館(Children's Library)	432m ²
課外活動室(Activity room)	90m ²

ヴィズオア公立図書館では第2期工事(1973年秋完成)に講堂、音楽鑑賞室を加え、さらに幼児室(a nursery)の増築をはかっている。此のことはデンマーク公共図書館における学齢前の幼児の利用が増加したことを語っている。

デンマークの公共図書館は新しい建築様式程児童を重視し、1階の主要部を成人と児童に2分する様な形で作られている。(第3図参照)

ヴィズオア公立図書館の様式がそれで、先ず入口の間(Hall)を入ると1階の中央部に達し、右が成人の部(Department for adult)、左が児童の部(Children's department)となる。児童部はデスクをへだてて、図書は様々な区画(sections)に分れる。即ち第3図の1階平面図にある如く、絵本(Picture books)、幼児用図書(Infants books)、馬なら馬の本のみを集めるという主題別の特殊文献(Special literature)、小説と詩(Fiction and poetry)などである。音楽(Musik)室では25の座席数(listening seats)があつて、受話器型のレシーバが机上にとりつけてある。その奥に課外活動室(Activity room)がある。此处が児童文化室とでも呼ぶべき部屋で舞台が設けられ音楽演奏室とその設備室、児童劇や映画の設備もあれば、おとぎ話(fairy-tale)をきく部屋にもなれば音読室(reading aloud)の部屋にもなり、余暇の時間を導く教育家(educationalist)もおれば、図画(drawing)や写生(sketching)を指導する教師(instructor)も居り、粘土(clay)で様々な造形(shaping)をしたり、切紙細工を楽しんだりする。カラーテレビもあればチェス遊びも出来る様になっている。幼児を朝あずけに来て夕方つれてゆく幼稚園に類した点もある。(写真9)はヴィズオア公立図書館の絵本(picture books)の区画で、低書架にかこまれた明るい部屋で絵本を見ながら先生の話をしきところ。(写真10)はやはり同図書館の課外活動室(Activity room)の1画で粘土細工や図画に囲まれている児童たち。(写真6.7.8参照)

(3) 公共図書館の自治体における義務設置と図書館職員の重視

公共図書館法第2章地方公共図書館3節に、

此の法が実施される日に国の助成金を受ける資格を有する公共図書館のない自治体においては、此の法の条項をみたす図書館の設置が1969年4月1日までに行われるものとする。
更に法第2章6節2項において

5000人以上の人口を有するサービス・エリアの図書館においては、全日司書(full-time librarian)と必要な事務員(requisite clerical assistance)を1969年4月1日までに任命す

るものとする。

又、法、第2章6節1項においては

図書館の仕事が、1人又はそれ以上の全日司書(full-time stuff)で運営されている場合は、その図書館の長(head of the library)は専門職司書の資格を有していなければならない。

以上で明らかなことは

- 1) すべての自治体に図書館を義務設置すること
- 2) すべての自治体は1自治体の人口を5000人以上とすること。
- 3) 1自治体の図書館は(5000人以上)は最小限1人の全日司書と必要な事務員をおくこと。
- 4) 1人又は2人以上の全日司書のいる図書館では、その館長は専門職司書の資格を有すること。

此の法が議会を通過した1964年にデンマークに滞在して王立図書館学校に出張講義をしていた「What Americans can learn from the Danes」(アメリカはデンマークから何を学ぶか)の著者モシヤー(Fredric J. Mosher)は、「1964年にデンマークにおいて1300の独立した公共図書館があったけれども、尚 200 の自治体が図書館を有していなかった。当時多くの自治体は人口1000人以下であった。新法は1自治体の人口を最小限、かつての4000人から5000人にするによって自治体の数を減ずることを要求した、」と語っている。又、人口5000人以上の自治体は全日司書を有し、全日司書をやとう図書館の館長は専門職でなければならぬということは当時図書館学校が、その大きさとカリキュラムに急激な変化(radical changes)を準備中であったので、その学校の拡張計画に重大な関係をもったとも語っている。

(4) 地方公共図書館、中央図書館、特殊施設図書館の3種の助成金の充実

先ず地方公共図書館に対する国の助成金の場合、公共図書館法第2章5節に

国は1公共図書館システムに対して総経費 275,000 クローネまでは、その総経費の45%をその金額を越える経費に対しては30%の助成金を補償しなければならない。

次に、郡(County)の中の中央図書館(Central library)である郡図書館(County Libraries)に対しては、法、第3章11節に

国は郡図書館(County Library)に対して、基本費として60,000クローネを補助し、その管内人口1人当たり2クローネを加算する(その図書館のある自治体と人口20,000又はそれ以上の自治体は除く)。

更に特殊施設図書館に対しては、法、第5章の特別助成金(Special Grants)として規定されている。その18節2項に、次の特別助成金は年次財政法に含まれるとして、

- (a) 国防省(Ministry of Defence)のとりきめによって軍の施設における貸出ののための分館を設置した図書館に支払われる図書及びその他の適切な資料の購入費、目録・製本の経費。
- (b) 商船々員図書館(Merchant Seamen's Library)に対する特別国家助成金
- (c) 結核患者ののための中央図書館(Central Library for Tubercular Patients)に対する特別国家助成金

(d) ライブラリー・ディレクター(Library Director)の推薦により文化大臣が、特殊なサービスの提供に対して個々の図書館に助成し、又、その他の方法では提供出来ない公共図書館サービスの分野における問題解決の爲めにも助成することが出来る。

国が地方公共図書館に助成金を出したのは1882年に始まったが、それは少額なものであった。1920年の公共図書館法に於て一応の定着を見て、それ以後上昇の一路をたどっている。又その図書館指導部(Library Director)の歴史も1882年の贈呈図書分配委員会(The Committee for Distribution of Book Gifts)から1909年の「国立図書館委員会」(The State Library Committee)へ、更に1920年の「指導部」(Inspectorate)と変り、1920年にはライブラリー・デレクター(a Director of Libraries)も任命された。

1920年以降1970年迄の公共図書館補助金と全経費との関係を第7表(注10)によってみると、1960/61と1965/66との間に一つの飛躍があり、1965/66と1968/69年の間に又一つの飛躍があることがわかる。前者の増額は1961年に、従来の文部省(Ministry of Education)のうち学校教育部門を除く社会教育と文化施策と、他の省に分散していた文教関係のものを所管するために独立の文化省(Ministry of Cultural Affairs)を特設したことによって助成金の大幅拡大を見、後者は、現行の公共図書館法によって、自治体における公共図書館の義務設置と図書館職員の専門職義務配置によるものと思われる。尚第8表(注11)によって、文化省新設後の1962/63年と1963/64年の両年度における、「国の文化関係経常費の比較」を見ると、デンマークの場合、文化省の施策が公共図書館を重点にすすめられていることが明白であると共に、日本の公共図書館の存在が軽視よりもむしろ無視されているに近いことも明らかである。特に日本の中小図書館に対しては然りである。デンマークの図書館システムが先ず第1に中小図書館の施策に向けられたのとは天地霄壤の差がある。1960年代の初期においてすらかかる状態であるから、更に

第7表 1920年以降の公共図書館補助金と全経費との関係を示す

年 度	人 口	公共図書館全経費	人 口 1 人 当 り 経 費	国 の 補 助 金
	人	クローネ	クローネ	クローネ
1920/21	3,079,000	1,544,000	0.50	513,000
1930/31	3,559,183	2,943,000	0.83	956,000
1940/41	3,834,213	6,098,000	1.59	1,752,000
1945/46	4,045,257	9,709,000	2.40	2,842,000
1950/51	4,270,992	18,560,000	4.35	6,232,000
1955/56	4,440,128	39,303,000	6.82	8,974,000
1960/61	4,578,702	49,857,000	10.89	16,180,000
1965/66	4,755,698	117,102,000	24.62	41,370,000
1968/69	4,859,960	204,658,000	42.00	73,091,000
1969/70		256,117,000	52.70	85,000,000

デンマークの図書館システム

第8表 国の文化関係経常費比較

—人口 100万人当たり 円貨に換算 単位 100万円

	1962/63年 歳 出				1963/64年 歳 出			
	デンマーク	%	日 本	%	デンマーク	%	日 本	%
文化省または社会教育 経常費総額	1,216	100	99	100	1,341	100	144	100
内 訳								
図 書 館 費	410	33.8	1	1	483	35.9	1	0.7
文 書 館 費	31	2.7	公民館費 2	2	36	2.6	公民館費 2	1.4
博 物 館 費	146	12.1	文化財費 9 } 17 }	26	151	11.4	文化財費 14 } 25 }	27
芸 術 振 興 費	322	26.2	1	1	354	26.2	1	0.7
学 術 振 興 費	202	16.8	南 極 37 } 5 }	42	244	18.3	南 極 42 } 21 }	44
平 和 促 進 費	68	5.6	ユネスコ 26	26	36	2.8	ユネスコ 37	26
海 外 文 化 費	16	1.1	体 育 1	1	16	1.3	1	0.7
そ の 他	21	1.7			21	1.4		

—デンマーク統計局年鑑、日本文部省統計によって計上—

飛躍的發展を遂げつつある現代のデンマークは日本の眼からみれば唯々驚歎の外はない。

(5) 文化省所属の図書館指導部 (Library Inspectorate) と図書館会議 (Library Council) の重要性

前述の如く図書館指導部は1882年来の歴史をもつが1964年法においては第6章「図書館指導部と図書館会議」の20節において

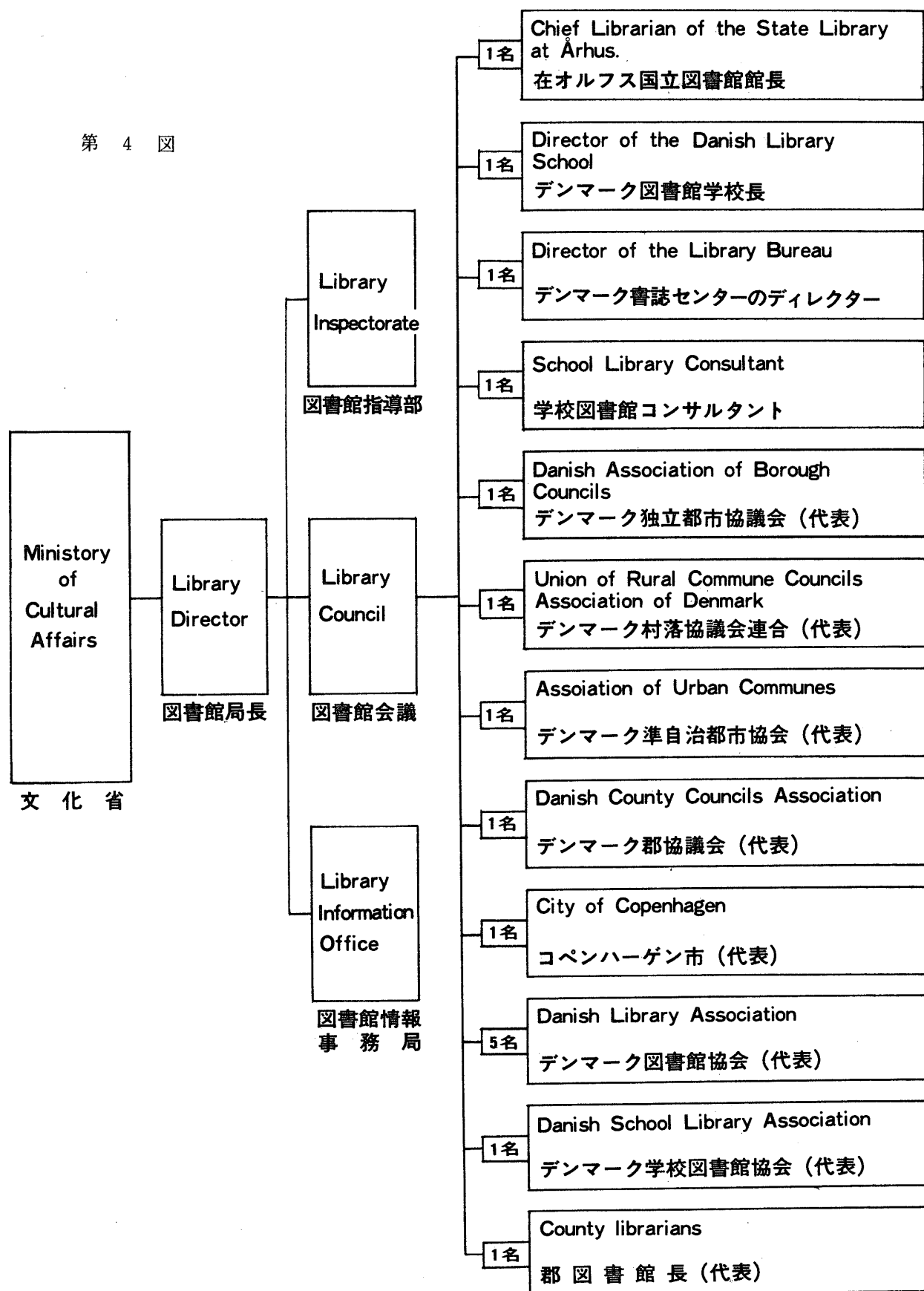
図書館指導部の長である図書館局長 (Library Director) は、国の助成金の算定と配分をし、各公共図書館に対して助言 (advice) と指導 (guidance) を与えなければならない。

とあり、その21節において

図書館局長がその議長である図書館会議は議長の外に16名の議員によって構成されている。とあり、第4図の如く、16名はデンマーク公共図書館関係の各階層を網羅したものである。その中職権上の資格で参加している在オルフス図書館長、デンマーク図書館学校長、図書館書誌センターのディレクター、学校図書館コンサルタントの4名の外は、各団体からの推薦によって文化大臣が任命する。任期は3年である。文化大臣か図書館局長が必要と認めた場合はいつでも会を召集することが出来る。会は少くとも年2回は開かなければならず、議員の5名以上の要求があれば会議を召集しなければならない。図書館局長は、年次の予算案が文化大臣に手渡される前に、図書館会議に提出しなければならない。又図書館サービスに関する重要な法案に関しては、此の会議に諮問し、協議しなければならないと規定されている。

要するに、公共図書館機能の立法面では図書館会議が、その行政面では図書館指導部が責任をもち、図書館局長は文化省と公共図書館システムを結ぶ扇の要の機能をもっているということが出来る。

第 4 図



IV 公共図書館システム

デンマークの公共図書館の相互協力によって生れた最も効果ある機関は

- 1) デンマーク書誌センター
- 2) コペンハーゲン情報事務局
- 3) 保存図書館

である

1) デンマーク書誌センター (注12)

現在ビブリオテークセントラーレン(*Biblioteks centralen*) と呼ばれるデンマーク書誌センター(national central bibliographic office)は1937年創設で、デシング(*Thomas Døssing*)が国の助成金の2½%を共通目的資金(common purposes fund)としてよけておくことを提案したことによるという。当初は「公共図書館の書誌部」(*Public Libraries' Bibliographical Department*)として知られた。1954年に学術図書館が加わった。

此の書誌センターは独立した機関で、その委員会は公共図書館指導部(*Inspectorate*)、デンマーク公共図書館、学術図書館、学校図書館の代表によって構成されている。主なる活動は、

- i) デンマークの新刊図書の分類・目録の中央化。(写真5 参照)

アメリカのデュイの分類(*Dewey classification*)に基ずく十進分類法のデンマーク版によって分類され、著者名・書名及び件名(authors, titles and subjects)を含むアルファベット順の目録と、主題(subject)のもとに配列された分類目録(a systematic catalogue which is arranged under subject)との2種類の索引(two index types)による印刷された索引カード(printed index cards)の完全なセットのユニットカードを作成して(年間約100万枚以上)図書と共に書店を通して各図書館に配布されるしくみである。

勿論これらの印刷は書誌センターの出版部(publication department)で行われ、外に十進分類法(*Decimal Classification*)や目録規則(*Cataloguing Rules*)も出版し、公共図書館用レコードの選定リスト(*Lists of new records*)も作っている。次の如き図書目録(booklists)も出版している。“Recent Danish Non-Fiction”, “Fiction”, “Children's Books”, “Books for Young People”, “New Books”, “Music Lists”, “Library News”, などである。尚、図書館の年鑑、図書館員用の教課書、定型用紙書式等も出版している。

- ii) 書誌的サービス

書誌部(bibliographical department)は非営利的サービスであるから国の助成金(State subsidy)と自治体の臨時費、学術図書館からの助成によって運営されている。主として「デンマーク累加図書索引」(*Danish Cumulative Book Index*)、定期刊行物索引(*Index to Periodicals*)、新聞記事索引(*Index to Newspaper Articles*)などである。

- iii) 図書館の備品と家具部

図書館の備品と家具部(equipment and furniture department)は学術図書館を含む多くの図書館が特に新館を設計する場合、旧館にニュールックをとり入れる場合に用いられる。

iv) 製本部

1949年から製本部(department for bookbinding)が出来て、規格製本(standard binding)を提供するようになった。デンマークの新刊は仮綴(paper bound)であったから、合理的な価格で良質の図書館製本(library bindings)を提供出来るようになった。

2) コペンハーゲン情報事務局

デンマークにおける相互貸借機能は、先ず郡図書館(County library)の中央図書館的機能であり、次はデンマーク公共図書館システムにおける全国的相互貸借図書館(national interlibrary loan library in the Danish public library system)である。更に相互貸借に最も重要な役目を果すコペンハーゲンの情報事務局(Information Office in Copenhagen)がある。

郡図書館の場合は管下の図書館に対して、ブック・バス(book bus)ならざるブック・トラック(book lorries)をもって大量にストックを貸し出す所に特長があり、コペンハーゲンの郡図書館の場合は約30万冊の図書のストックを有し、管下の各公共図書館に貸出し、又20~30冊の複本のフィクション(fiction)を(石川県立図書館の10冊文庫の如きもの)研究グループに自由に貸し出している。これらのセットは大量に求められている。(these sets are much sought after)

さて、利用者の1人がある図書(或いはある資料)を要求したとして、その図서가地方公共図書館にも郡図書館にもなかった場合は、その要求(request)は在オルフスの国立図書館に持ち込まれる。そこにある資料は、

蔵書一約 1,100,000 冊(納本制でデンマーク出版のすべての図書、創立以前の図書は王立図書館に納本されていた2部の内の1部譲り受け、その分150,000冊、私立図書館からの購入図書等を含む)

パンフレット——デンマーク出版のすべて。

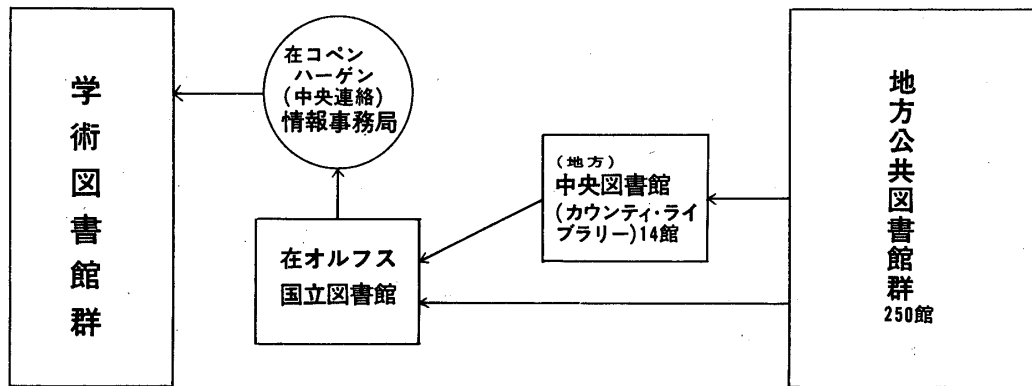
音楽資料——デンマークで2番目の大量収集。

外国文献——大規模な収集

以上の資料で尚その要求に応ずることの出来ない場合は、コペンハーゲンの情報事務局にもちこまれる。これが公共図書館における貸出ルートである。(第5図)

此の情報事務局(Bibliotekernes Oplysningskontor)は1926年に図書館指導部(Inspectorate)のもとに創設された。デンマーク語のBibliotekernesはLibraryであるが、Oplysningskontorは英語のinquiry office 又はinformation officeに当る。在オルフス国立図書館にない外国書を探す目的で設けられた施設である。1961年には文化省のもとで独立した施設となった。その管理は学術図書館と公共図書館を代表する図書館会議(Library council)の議長(chairman)である図書館局長(Library Director)があたっている。(第4図参照)。情報事務局は学術図書館から公共図書館への相互貸借を増進する(to promote loans to public libraries from the research libraries)目的をもっている。そこには次の資料がある。(注13)

第5図 公共図書館における貸出ルート



外国図書の総合目録(union card catalog of the foreign books)

すなわち2つのABC順の索引目録と多くの書誌を有している。1つは1908～1940年のデンマーク学術図書館購入の外国図書の索引目録であり、他は1926年以後のデンマーク公共・学術図書館における新刊外国図書の索引目録で、その索引目録の件数は1,250,000に及んでいる。

此の情報事務局で扱っている外国図書の貸出件数は年40,000冊位で、約1000冊を外国図書館から借り出している。これは此の情報事務局が国際的な図書館相互貸借の交換所の役割も果たしているからである。

3) 保存図書館(注14)

保存図書館は独立した施設であって、その運営は、公共図書館の各館種別代表と図書館指導部(Library Inspectorate)、在オルフス国立図書館及びコペンハーゲン情報事務局の代表会議によってなされている。

1964年の公共図書館法では次の様にのべている。

定期の在庫品調べによって、図書館はその本が流行おくれであるか、すりきれているか或は長い間借りられないままであるか確かめ、その図書館の貯蔵室に保存する価値ありと考えられるか或は共同の保存図書館(joint reserve library)で処理される特殊な場合を除いては廃棄されなければならない。

保存図書館は1970年まで主としてデンマーク語の図書が60,000冊受け入れられた。1971年にはその図書のストックが100,000冊に達した。外国の図書、デンマークの図書たるとを問わず、あらゆる図書及び定期刊行物、児童図書が無制限に受け容れられ、良好な状態に保存され、やがて、旧いデンマークの文献の要求に対して、在オルフス国立図書館を助けて、早晚貸出活動を始める準備をしている。その資金は、共同の図書館計画の為めの特殊目的資金(Special purposes fund)とコペンハーゲン府(Greater Copenhagen)における公共図書館間協力委員会(Committee for Cooperation among Public Libraries)よりの助成金によってまかなわれている。

V む す び

貸出とレファレンス・サービスはデンマークのすべての図書館が利用者のための主たる業務としている所である。公共図書館においては、それ故、在オルフス国立図書館の中央図書館的運営となり、コペンハーゲンの情報事務局の公共・学術両図書館の貸借センターとなったのである。デンマークのすべての公共図書館が貸出とレファレンス・サービスの2つの機能をもっていることは勿論であるが、大きな図書館になると貸出部と情報部をもってサービスをしている。レファレンス・サービスは情報センターで行うというのがデンマーク図書館の立前で、情報部は参考図書群の外にあらゆる書誌、定期刊行物、新聞などを含んでいる。定期刊行物と新聞は重要な情報資源であり、在オルフス国立図書館では2つの特殊サービスを提供している。1つは外国の学術専門雑誌(foreign scholarly and technical periodicals)の回覧サービスであり、他は新聞切抜の回覧(the circulation of newspaper clippings)サービスである。

前者はデンマークのいかなる地域に住んでいる人も彼が送られる事を欲する雑誌を指示し、調査したいと思う雑誌にわずかの手数料を払うことによって「雑誌閲覧サークル」(“periodical reading circle”)の加入者となることが出来る。雑誌が国立図書館に納入されると、その雑誌は此のサービスを求めて予約した読者に送られる。各読者はリストにある次の読者名に送るまで10日間その雑誌を借りておくことが出来る。此のサービスは大変評判がよく1800の外国雑誌が2600人の読者の間を回覧されており、加入者からのコピーの依頼も多数にのぼっている。

後者の新聞切抜の回覧サービスもまた大いに利用されている。デンマークの新聞は書誌センター(Bibliotekscentralen)に於て、「新聞記事索引」(Index to Newspaper Articles)が出版されている。その記事索引に用いた新聞記事の切抜は書誌センターから在オルフス国立図書館に送られる。月1回発行される新聞記事索引は各図書館で閲覧される。新聞記事索引の中から読みたいと思う項目(item)を発見した読者は国立図書館に申し込む。国立図書館から読者にその切抜を送るというしくみである。

デンマーク図書館のレファレンス・サービスはその多くは電話で聞かれ電話で答えられる。1962年に図書館協会(Library Association)は、電話によって図書館を利用することがいかにやさしいか(how easy)を示すために全国的な広報運動(national advertising campaign)を開始した。「電話をかけて尋ねて下さい。図書館は本が答えてくれるものは何んでも答えることができます」(“Ring and ask, The library can answer anything books can answer”)此のキャンペーンは公衆にアピールしてレファレンス・ライブラリーの利用は急激に増大した。

今度は紙数の関係でデンマーク公共図書館の第1線活動即ち分館、自動車文庫、book boatにふれることが出来なかったが、例えばヘルシンガー公立図書館(Helsingør Kommunes Biblioteker)の如く人口45,000人の図書館で本館1、分館2、ブックモビル1台であって分館活動の及ばない所を自動車でサービスをしている。将来人口72,000人になるのを予想して、その時は分館をあと3個ふやす予定という。1万人に分館1が適当であるとは館長の言である。図書

館システムのサービス網がいよいよ深く張りめぐらされようとしている。

過去50年間営々として築きあげて来たデンマーク図書館システムから何を学ぶべきか。日本図書館システムの未来像はいかに築きあげてゆくか——それが現代の情報化社会に対処する私達に与えられた大きな課題であると思う。（イタリック体はデンマーク語）

(注)

(1) 「図書館の未来像」『図書館雑誌』1970, No.4～5

(2) Thorsen, Leif ; Public Libraries in Denmark. Copenhagen, 1972. p.6 (Kay-Larsen, Mogens 英訳)

(3) 同上、P.122

(4) 同上、p.155

(5) Birkelund, Palle ; The Danish Research Library System. Copenhagen 1973 p.2-5.

以下述べる学術図書館システムは此の書と前述のThorsen の書による。

(6) 此の第I図はBirkelund, Palle 氏の講義に用いられたものの撮影による。

(7) Mosher, Fredric J. ; What Americans can learn from the Danes. p.962. (Wilson Library Bulletin, Vol.43.No10, June 1969)

(8) 以下の論は、王立図書館長ハレ・ピアケルンド氏提供の「Danmarks Biblioteksskole. The Royal Danish School of Librarianship」(付設計図)と「The Royal School of Librarianship, Copenhagen」によった。

(9) 以下法の引用は、デンマーク側提供の「Public Libraries Act」(Act No171 of 27th May 1964)による。

(10) 弥吉光長：「デンマークの公共図書館サービス」(図書館雑誌Vol.65, No.4)

(11) 平林広人：「デンマークにおける図書館網と公共図書館」(都市問題、56巻2号、1965年2月)

(12) 「Public Libraries in Denmark」p.136～140. Thorsen, Leif は英訳のLibrary Bureauの語で説明している。Mosher, Fredric J. の「What Americans can learn from the Danes」ではBibliotekscentralen の見出しのもとに説明している。デンマーク語の直訳は図書館センターとなるが、その最初の命名「Bibliographical Department」及びその機能から「書誌センター」の訳語を用いた。

(13) 「Public Libraries in Denmark」p.125～126

(14) 同上、p.126～128

昭和48年3月18日から4月3日迄17日間東海大学ヨーロッパ学術センターとデンマーク王立図書館主催の「デンマークに於ける図書館セミナーと欧州図書館視察旅行」の中で、デンマークにおける図書館セミナーは3月18日から3月22日までの日程で行われた。その間、王立図書館長パレ・ピアケルンド氏、王立図書館学校長ブリーヘン・キャゲゴー氏、図書館コンサルタントのイエス・ピーターセン氏等の講義を聞くことが出来た。数々の御厚意に謝意を表したい。尚此の論文と前後して、図書館セミナー報告書として「デンマークの図書館と社会」が東海大学より刊行の予定であり、私の所論「デンマークの公共図書館論」が掲載される筈である。